

第10回福島原発事故による長期影響地域の生活回復のためのダイアログセミナー

「福島における伝統と文化の価値」

2014年12月6・7日（土・日）

会場：伊達市役所シルクホール（阿武急大泉下車、徒歩5分）
<<http://www.city.date.fukushima.jp/soshiki/5/338.html>>

発起人

国際放射線防護委員会（ICRP）

協力と後援

飯舘村、伊達市、放射線安全フォーラム、福島のエートス、福島県立医科大学
フランス放射線防護・核安全研究所、ノルウェー放射線防護局、フランス原子力安全局
経済協力開発機構・放射線防護公衆衛生委員会、

同時通訳

ディプロマット社（平野加奈江、町田公代）

会合関連サイト

ICRP 通信：<http://icrp-tsushin.jp/>

福島のエートス：<http://ethos-fukushima.blogspot.jp/>

第10回ダイアログセミナーの目的

第10回ダイアログセミナーを「福島における伝統と文化の価値」のテーマで開催する。福島原発事故では、放射線が人々の日常生活に侵入した。その放射線については、健康影響に関するさまざまな意見が氾濫し、政府の対応も混乱を極めた。これは、放射線の健康影響についての判断について人ごとに異なる状況をもたらした。その結果、夫婦、家族、コミュニティーなどあらゆるレベルでの分断が生じ、今に至っている。しかしこの状況にあってもなお人々が共有できるものに伝統や文化がある。伝統と文化は、守り育て受け継ぐものであり、これは、分断された状況のなかでも人々が共有し得るものである。そしてこの共有は人々をつなぐ。文化や伝統には、祭のような華やかな非日常の活動の中で保たれ、また野良仕事や食生活など生活の片隅の中にも今日まで息づいている。さらに伝統には古くから守られてきたものもあり、文化の中には現在も育ちつつあるものもある。

今回のダイアログでは、放射線による分断の中でなお人々をつなぐものを学び、伝統や文化が復興にもつ意味について対話を行う。

同時通訳

英語と日本語の同時通訳をイヤホンで聞くことができます。

セッションの構成

午前：発表セッション

午後：対話セッション

その他

昼食（お弁当）およびペットボトルなどは主催側で用意してあります。

6日夕方はだてみらいホール保原でレセプションを開催します。

プログラム

第1日目 12月6日(土)

9:30-10:00 開会

全体司会：ジャック・ロシヤール(フランス、CEPN)
多田順一郎(福島、放射線安全フォーラム)

挨拶

飯舘村々長 菅野典雄
ICRP 委員 ジャック・ロシヤール

自己紹介

国内・海外参加者の自己紹介(各自1分で名前、専門、経験などを話す)

10:00-10:40 セッション1 発表：福島的生活文化(40分)

菅野元一(飯舘、元農業高校校長)：福島的生活文化と山菜(20分)
佐藤金正(県会議員)：福島的生活文化と畜産(20分)

10:40-12:20 セッション2 発表：チェルノビル事故の影響を受けたノルウェーの地域への訪問(100分)

飯舘村のノルウェー訪問：全体発表(5人、60分)
安東量子(いわき)：訪問の経緯報告と司会(10分)
多田朋永(飯舘村役場)：ノルウェー訪問の報告
齊藤博史(飯舘村役場)：ノルウェー訪問の報告
山田猛史(飯舘村)：畜産農家としてのノルウェー訪問
菅野クニ(飯舘)：飯舘の女性としてのノルウェー訪問
飯舘村からの訪問を受けて(40分)
アストリッド・リーランド(ノルウェー放射線防護庁)：
人と人との交流の価値(20分)
佐藤吉宗(スウェーデン)：スウェーデンにおけるチェルノビリ事故の影響(20分)

12:20-13:20 昼食

お弁当が用意されています。

13:20-13:40 実演：伝統の踊り(市役所1階の階段前)

外内手踊り保存会(飯舘村外内)：手踊り実演(20分)
青木好光(飯舘村外内)：保存会会長・踊り手
三瓶政美(飯舘村外内)：世話人
愛澤文良(飯舘村外内)：行政区長
青木公男(飯舘村外内)：踊り手・おいとこ
佐藤キミノ(飯舘村外内)：踊り手・おいとこ
田辺巖(飯舘村外内)：踊り手・おいとこ
佐藤ひろこ(飯舘村外内)：踊り手
青木直子(飯舘村外内)：踊り手
佐藤義明(飯舘村外内)：踊り手
三瓶たつ子(飯舘村外内)：踊り手
赤石澤末子(飯舘村外内)：踊り手

愛沢 めぐみ（飯舘村外内）：踊り手
青木 弥生（飯舘村外内）：踊り手
赤石澤 京子（飯舘村外内）：踊り手

**14:00 – 16:00 セッション3 対話：福島における伝統と文化の価値
ステップ1 一何が問題か**

司会：ジャック・ロシヤール（フランス、CEPN）

報告担当：ジャンフランソア・レコンテ（フランス、CEPN）

ステップ1の進め方：

ステップ1で対話参加者は設問に対する回答を2回行う。

初回は自分の意見を述べる。

次回は他の方々の意見を聞いたあとで、自分の意見を述べる。

パネル討論参加者

菅野典雄（飯舘村長）
黒田裕次郎（福島医科大学）
菅野 元一（飯舘村）
佐藤 金正（県会議員）
安東 量子（いわき）
多田 朋永（飯舘村役場）
齊藤 博史（飯舘村役場）
山田 猛史（飯舘村）
菅野 クニ（飯舘村）
境野 健兒（福島大学名誉教授）
三瓶 政美（飯舘村外内）
愛澤 文良（飯舘村外内）
青木 公男（飯舘村外内）
佐藤 ひろこ（飯舘村外内）
大森 真（テレビユー福島）
菊池 克彦（民友）

16:00 – 16:30 休憩

16:30 – 17:00 報告担当者によるまとめと総合討論

司会：ジャック・ロシヤール

報告担当：ジャンフランソア・レコンテ（フランス、IRSN）

17:00 移動 伊達市役所からマイクロバスでレセプション会場に移動

17:30 – 19:00 レセプション 参加無料です。ぜひご参加ください。

場所：みらいホール伊達（<http://navifukushima.com/>）

〒960-0672 福島県伊達市保原町字下野崎 5-1、TEL:024-576-3112

飯舘村菅野典雄村長ご挨拶の後に歓談

第2日12月 7日（日）

9:30- 開会

全体司会：ジャック・ロシヤール(フランス、CEPN)
多田順一郎（福島、放射線安全フォーラム）

挨拶

伊達市長 仁志田昇司

自己紹介

新規参加者の自己紹介（各1分で名前、専門、経験などを述べる）

9:50-12:05 セッション4 発表：福島における伝統と文化の価値（135分）

福島における祭り（30分）

高橋 重義（前福島市ふれあい歴史館職員）：福島における地域の歴史と祭り

伊達市地域での祭り与人々（55分）

太田 正孝（月舘）：月舘上手渡地域小志貴神社における牡丹獅子舞の継承（20分）

柳沼 守（富成）：富成の諏訪神社における祭太鼓の継承（15分）

佐藤 忠信(福島市) 大森赤城神社の祭りの新興住宅地域での創生（20分）

飯舘村の伝統芸能の継承・復活と地域づくり（20分）

境野健児（福島大学名誉教授）：飯舘村の祭り与人々のつながり（20分）

音楽を通じた人と人のつながり（3人、30分）

大森 真（テレビU福島）：フェスティバル FUKUSHIMA の活動紹介と司会

宍戸 カンナ（福島高校 Jazz 研究部）：震災後の福島での高校生活

片平 なつみ（福島高校 Jazz 研究部）：震災後の福島での高校生活

12:10-13:10 昼食

お弁当が用意されています。

13:10-13:30 実演：伝統の太鼓（市役所1階の階段前）

諏訪神社の祭太鼓の実演（10分）

柳沼 守（富成）

佐藤 秀人（保原高校）

菅野 亜実（松陽中学校）

13:40-16:00 セッション5 対話：福島における伝統と文化の価値

ステップ2—どのように前進するのか

司会：ジャック・ロシヤール（フランス、CEPN）

報告担当：テリー・シュナイダー（フランス、CEPN）

ステップ2の進め方：

ステップ1で対話参加者は設問に対する回答を2回行う。

初回は自分の意見を述べる。

次回は他の方々の意見を聞いたあとで、自分の意見を述べる。

パネル討論参加者

早野龍五（東京大学）
黒田裕次郎（福島医科大学）
菅野 元一（飯舘村）
佐藤 金正（県会議員）
安東 量子（いわき）
菅野 クニ（飯舘村）
勝見 五月（福島、元伊達市教育員会）
柳沼 守（富成小学校元PTA会長）
佐藤 忠信（福島市大森一区）
小林 誠（伊達市地域おこし支援員）
佐藤 義秀（富成小学校元PTA会長）
佐藤 秀人（保原高校）
大森真（テレビユー福島）
宍戸 カンナ（福島高校 Jazz 研究部）
片平 なつみ（福島高校 Jazz 研究部）
境野 健兒（福島大学名誉教授）
三瓶 政美（飯舘村外内）
愛澤 文良（飯舘村外内）
青木 公男（飯舘村外内）
佐藤 ひろこ（飯舘村外内）
菊池克彦（民友）

16:00 – 16:30 休憩

16:30 – 17:00 報告担当者によるまとめ

報告担当：テリー・シュナイダー

17:00 – 17:30 閉会

全体のまとめ（10分）

テッド・ラゾ（フランス、経済開発機構）

閉会の挨拶

ジャック・ロシヤール

これまでのダイアログセミナー

国際放射線防護委員会（ICRP）は、長期汚染地域居住地域住民の防護に関する勧告において、汚染地域の住民と専門家が状況の対応に直接関与することが効果的であること、および国や地域の行政は地域住民が自ら決定しうる状況を作りだし、その手段を提供する責任があることを強調している。

この観点に基づき、ICRPは、2011年秋以来、会合を開催し、福島県の代表、専門家、地域住民の方々、およびチェルノブイル事故について経験を有するベラルーシ、ノルウェー、フランスの関係団体からの代表などが、福島原発事故の影響をうけた地域の長期の回復に対する挑戦についてその方策をさぐるためのダイアログセミナーを行った。

2011年11月の第一回ダイアログセミナーは、ステークホルダーによる影響をうけた地域とそこでの懸念についての討論の促進を行った。

2012年2月の第二回ダイアログセミナーでは、福島県の地域住民の状況と問題に焦点を当て、状況の理解の進展と、汚染地域の回復に向けた経験の共有することの価値を認識した。人々は、状況についての懸念を表明した。

2012年7月の第三回ダイアログセミナーは、とりわけ困難な食品汚染の問題について、異なる要求をもつ消費者、流通業者、生産者に来ていただき、食品の品質の改善と消費者の信頼獲得にむけて議論した。

2012年11月の第四回ダイアログセミナーでは、これまで3回のダイアログを通して得た理解を踏まえ、子どもの教育を取り上げた。参加者は放射線防護の備えの重要性を強調し、線量測定が個人個人の放射線状況を把握する重要な道具であると認識した。事故の記憶と経験は、その困難においてのみならず、積極的な側面もあることが認識された。

2013年3月の第五回ダイアログセミナーは、「帰還」を取り上げた。帰還する、しないの決断は、単に放射線状況のみならず、長期汚染を受けた地域での生活の全ての状況を考慮してなされる。帰る・帰らない、留る・去る、の選択肢どれも困難を伴う。また決めかねている間に状況は刻々と変化する。この複雑で困難な問題について、幅広い関係者、組織、住民、教師、医師、行政、チェルノブイル経験者が一堂に会し、立場の違いを越えて、汚染地域の困難な状況に前向きに立ち向かうために共有すべき価値を探った。

2013年7月の第六回ダイアログセミナーでは、「飯舘」の人々が直面する現状と挑戦を取り上げた。2日間の熱心な議論を経て、4つの勧告がまとめられた。それらは異なる見解を表現することに敬意をはらい、情報の交換を助け、自ら定めることを推進するダイアログの場を作る。村民、研究者、専門家が協力して住民のためのプロジェクトを推進するための枠組みを確立する。除染の優先順位を定め、村民の被ばく低減に有効な他のすべての可能な方策について検討する。ご高齢の方々が飯舘に帰るか帰らないかを自ら決断するための状況を可能な限り速やかに作り上げる。

2013年11月の第七回ダイアログセミナーは、いわきと浜通りの人々が専門家と共におこなった自助活動に焦点を当てた。本ダイアログは、これまでと違って、人々やコミュニティが、専門家の指導のもとにどのようにして身近な環境を理解しその状況をコントロールする活動に取り組んだかについての一連の証言が発表された最初のもので

あった。発表や討論を通じて、これまでのダイアログの勧告にある個人線量の測定、自助による防護、経験の交換、人々やコミュニティーの必要に応じた専門知識の役割、などを実際の場で役立てることができ、しかもそれが住み慣れた地域でまともな生活を送るため、人々を支援する上で効果的であることが明らかになった。

2014年5月の第八回ダイアログセミナーは、地震、津波、原発事故の3重の災厄に見舞われた南相馬市に焦点を当てた。南相馬市は、警戒区域、屋内退避区域、指定のない区域に三分され、かつ指定の無い区域にも特定避難勧奨地点が散在する。この極めて複雑な放射線状況の中で、住民の間での情報と理解の共有は極めて困難である。当初市民の9割が避難した。そして人口の5割程度までは戻った現在でも、家族内で別れて避難を継続する人々は少なくない。そのなかで放射線に対する不安と政府・専門家に対する不信は今も人々の心の奥底にある。このような中で、一部の人々は、自ら、また外部専門家等の支援を受けつつ、地域の放射線状況の理解と改善、復興のためこれからの30年を見通した活動を開始している。

2014年8月の第九回のダイアログセミナーは、「福島で子どもを持つ」というテーマで開催した。本会合では、放射線が福島の人々の日常のなかで、子育てに大きな影響を与えていることを取り上げた。放射線は、子供の健康影響のみならず、母親の心にも大きな影を落としている。子供の健康への懸念から県外へ避難する方がおられる一方で、子供の心身面での健康と家族の絆を重視する観点から、あえて福島での子育てする判断した方もあり、さまざまな局面から対話がなされた。会合には、子育ての悩みを持つお母さん、保育所・幼稚園心理関係者、それに大学等の研究者、さらに報道関係者や自治体・国の行政担当者などの参加があった。